

特集

加東の地を潤す水がめ 東条湖

加東市をはじめとする東播内陸部のかんがい用水供給施設として建設された東条湖は、今年で60周年をむかえます。農業生産の拡大を支え、戦後の高度成長の大きな原動力となった時期を経て、現在においても農業用水や水道水の供給、観光振興に大きな役割を果たし続けています。

今月号の特集では、私たちの日常生活を支える東条湖についてご紹介します。

米どころの悩み

現在の加東市が位置する東播内陸部は、昔から酒米山田錦をはじめとするお米の生産地として、その名が知られていました。しかし、この米どころは干ばつの常習地でもありました。

今と比べ、日常生活と農業との関わりが深かった当時は、ひとたび水が不足すると、地域住民の生活は大きな打撃を受けていました。そのため、水不足の解消は、この地域の長年の悲願でした。

そして、この深刻な水不足を解消するために、東播内陸部にダムを建設し、土地改良事業を行うことが戦前から計画されていました。

ダムの建設計画

「天恵の地形、土井は池になる。」

大正末期から語り伝えられていた有名な言葉です。

「土井」とは、現在東条湖の湖底に沈んでいる旧東条町黒谷の土井集落のことです。土井集落は四方を山で囲まれた盆地にあり、鴨川が流れる部分だけが小さく開いていました。そのため、

開いている1か所をふさぐだけで池になるという地形だったのです。

昭和初期にはすでに付近一帯の町村長により期成同盟会が結成され、この計画は国会にも持ち込まれていました。しかし、当時は築堤技術が未熟だったことや、太平洋戦争の影響もあり、計画が実行に移されることはありませんでした。

戦後復興にむけて

戦後、わが国を襲った深刻な食糧不足により、農業生産の増大は緊急の課題となりました。そのため、戦争で中断されていた東播内陸部の土地改良事業計画が再び台頭してきました。そして、地元町村長会などからの熱心な要望活動の結果、国営でダムを建設することが決定しました。

農林省は、昭和21年7月に職員を現地へ派遣し、付近一帯の調査をはじめ、昭和22年3月に実施計画書が完成しました。そして、同年5月には上東条村役場内に農林省東条川農業水利事業所が設けられ、ここにダム建設を柱とする国営東条川農業水利事業がスタートしたのです。

東条湖小唄

作詞 富田碎花
作曲 井澤文太郎

土井の瀬の瀬で 鴨川せいで

あわせかがみか 湖のいる

トントントンカラリの東条湖

山の湖鎮守は水天宮

東条名どころ 米どころ

水に映った 家ヶ峯晴れて

いっそ化粧する 秋津富士

播州清水 お山の塔へ

虹が立ちます 湖水から

せきのかけ橋 水天宮

まわせ梶とり たのみます

岩の妹背は屏風でかくす

滝に立つ名が 何故消せぬ

五所の峡谷 蓬萊 鞍馬

高嶺鷺の巢 不動岩

におつ六甲 描き眉ひいて

化粧ばえした 東条湖